

角間隆

日本列島「漂流」の危機

世紀末の
死闘

日本列島「漂流」の危機

世紀末の死闘

角間隆

読売新聞社

角間 隆 (かくま・たかし)

1936年9月27日、大阪市に生まれ、金沢で育つ。60年、東京大学法学部卒業後NHKに入り、報道・社会番組、海外取材・特別番組などドキュメンタリィを制作。在局中の64年、コロンビア大学に留学。80年、退局、ノンフィクション作家として独立。現在、著作活動のかたわら、日本大学で情報産業論を講じている。

著書に『燃えるアメリカ』(中公新書)、『アメリカの革命』(平凡社)、『赤い雪』(読売新聞社)、『日本の支配階級』(PHP)、『恐るべきアメリカ』(同)、『アメリカを読む事典』(政治篇、経済篇、社会篇全3巻、同)、『世界技術戦争最前線』(全3巻、グリーンアロウ社)など多数。

世紀末の死闘

日本列島「漂流」の危機

定価九八〇円

著者——角間 隆

編集人——守屋健郎

発行人——加藤祥二

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一—七—一
大阪市北区野崎町八—一—〇
北九州市小倉北区明和町一—一—一

〒一〇〇
〒五三〇
〒八〇二

印刷所——凸版印刷株式会社

製本所——株式会社 堅省堂

第一刷——一九八二年二月二七日

0093—703360—8715

© 1982, KAKUMA Takashi

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

世紀末の死闘

日本列島「漂流」の危機

目次



文明の奢りが呼んだ大旱魃—— 6

砂漠化が誘った大洪水—— 28

迫りくる食糧危機—— 54

ニュー・フロンティアへの進撃—— 74

大寒波、北米大陸を直撃す—— 97

ブラック・ボックスの恐怖—— 119

シエルトーからの反撃——
141

核戦争の危機せまる——
166

食糧戦争の勃発——
203

クオ・ヴァデイス・日本？——
231

装丁

辰巳四郎

本文イラスト

加藤孝雄

世紀末の死闘

日本列島「漂流」の危機

文明の奢りおごが呼んだ大旱魃だいかんばつ

列島を襲う水キキン

予兆はあった。一九八〇年代の声を聞いたころより、にわかに氣候不順のテンポが早まり、早くも三月の終わり頃からムシ暑くて寝苦しい真夏日が一月以上も続いたかと思うと、六月に九州の最南端で直径十センチもある電ひょうが降ったり、東京の都心部を一時間に一八〇ミリの雷雨が急襲するといった「異変」が相次いで起こった。しかし、天下泰平に慣れきった人々は、いちおう形ばかり心配せうな顔つきだけはしてみせたが、心の中ではまだまだタカをくくっていた。

「米がとれなくなりや、かえって古米や古々米がハケて具合がいいじゃないか」

「酷暑といっても、夏というのとはことん暑いほうが身体にいいし、だいいちクーラーなんかも売れるから景気もよくなって結構だよ」

「なあに、セントヘレンズ噴火の火山灰がおさまれば、お天気なんてすぐに回復するさ」

……しかし、五年たっても、六年たっても、大自然の怒りは、一向に鎮まる気配を見せなかった。それどころか、日本列島を取り巻く黒潮や親潮の流れまでが変わり、九十九里浜に巨大な氷山が打ち上げられたり、能登半島一帯の海水浴場に人食い鮫が出没するというような椿事が、日常茶飯のごとくに繰り返されるようになってきた。

そして、一九八八年の夏、もう少しで九〇年代に突入する寸前、遂に日本列島は、史上未曾有の大早魃^{かんばつ}に襲われた。意外なほど暖かい冬があっという間に過ぎたかと思うと、二月の終りには早くも鹿児島あたりから花の便りが聞かれはじめ、三月の半ばごろには上野の桜が満開となり、その月の終りには、みるみるうちに桜前線は津軽海峡を越えて北海道の彼方に消えてしまった。

いつもの年なら、そのころから田植えが始まり、やがて大陸から張り出してきた梅雨前線の影響を受けて、来る日も来る日もジトジトした霖雨^{りんう}の季節に入っていくわけであるが、この年に限って、雨は一滴も降らなかった。

「今年はいいわね、梅雨がなくなっ」

「いっそ、このまま夏に入ってくれないかしら」

都会の主婦たちが洗濯ものの片手に笑いさざめき合っているころ、農村部では、植え終わったばかりの早苗^{さなえ}に水をやるため、必死の努力が繰り返されていた。近くの山々からの雪解け水がほとんど流れてこないため、すでに川という川は乾ききっている。やむを得ず、去年までの水をたたえた遠くの沼や湖にトラックで乗りつけ、何十個というビニール罐に灌漑用の水を汲んではピストン輸送する。

「苗を枯らしちゃ元も子もない。一雨くるまでの辛抱だ」

農民たちは齒を食いしばってがんばった。しかし、五月が過ぎ、六月が過ぎても、一片の雨雲さえやってはこなかった。頼みの綱だった山間部の湖沼の水位もぐんぐんと下がり、これ以上水運び出させまいとする近隣の農家とトラック軍団との間で、骨肉相食む「水争い」が始まった。

残るは、飲み水用の貯水池だけである。

「このままでは米が全滅する。貯水池の水を田んぼにまわせ！」

「米なんかとれなくなっちゃってかまうもんか。これ以上、「高い米」の犠牲になるのはマッピラだ」

今度は、農村と都市の水の争奪戦が開始された。しかし、それも束の間、七月半ばごろになると、最後の頼りだった貯水池や浄水場の水さえほとんど底をつき、東京や大阪はおろか、比較的ゆたかな水に恵まれていたはずの山あいの小都市ですらも、一日に「二時間給水」か「三時間給水」するのが精いっぱい状況になってしまった。

巨大な都市をいくつもかかえた先進文明国の水の消費量はすさまじい。世界人口の八〇％以上が、いまだに水道の恩恵に浴せず、不衛生な水のため毎年一千万人以上の人々が生命を失っているというのに、日本やアメリカ、ヨーロッパの大都会に住む人々は、一人で一年間に数百トンの水道水を文字通り「湯水の如くに」使い捨てにしている。また、それらの文明諸国によって消費される工業用水の量も幾何級数的な勢いで増えており、今世紀のはじめにはわずか三百億トンだったものが、一九七五年には六千三百億トンに急増し、さらに二〇一五年には二兆七千五百億トンに達するものと推定されている。そして、世紀末のある日、ついに「天罰」が下ったのである。

水洗便所が使えないため、夜陰に乗じて、ビニール袋につめこんだ汚物を街路に投げ棄てるものが

あとを絶たず、街中が異様な臭気につつまれ、得体の知れない疫病がはやりはじめた。

「み、水をくれ、水をっ」

「一度でいいから風呂に入りたい!」

からだじゅうにアカをこびりつかせ、その間から不気味な吹き出ものや湿疹をのぞかせた伝染病患者が、ノドをぜいぜい鳴らしながらコンクリート・ジャングルの谷間をさまよい歩く。

しかし、病院といえども事情は同じで、手術ひとつするにしても水がたりず、患者たちは、膿血と悪臭の中でアテもなくのたうちまわるだけであった。暑いから、ビルというビルが冷房機をフル回転させ、その灼熱した排気が平均気温をいっそう押し上げ、ますます暑くなる……まさに地獄のような悪循環である。

しかし、暑いくらいはまだ我慢できるが、大企業や大工場が先を争うようにして地下水を汲み上げはじめたため、ジオイド（平均海面）下千数百メートルまで打ち込んだパイプですら、一滴の水も吸い上げることができなくなってしまった。工場生産はバッテリーと途絶え、スーパードレストランも、一軒残らず

米大統領調査団報告書

「西暦一九七五年から二〇〇〇年までの間に、世界の水需要は、少なくとも二〇〇%から三〇〇%の割合で増大するものと予測される。水不足と水質の悪化は、すでに世界の多くの地域において深刻化しているが、西暦二〇〇〇年までにますます悪化することになるであろう。少なくとも、人口増加だけによって、世界の約半数の国々では、水の需要が、一九七一年にくらべて二倍の量にふくれあがる。そして、それに加えて、生活水準を向上させるためには、さらに多くの水の供給が必要になってくる。

したがって、増大する水需要の多くは、アフリカ、南アジア、中東、ラテン・アメリカなどの後進途上国で起こるだろう。しかし、先進工業諸国においても、増大一途の食糧生産、新しいエネルギー・システム、巨大化する水力発電、その他の産業開発などのためにますます大量の水を消費するようになるから、多くの地域で深刻な水不足が起こるに違いない」（一九八一年）

店を閉めてしまい、列島全域にただ烈日が照りつけるのみ――。

「政府は何をしてるんだ！」

怒りの声がどす黒く渦巻いたが、政界も、官界も、いたずらに手をこまぬいていたわけではない。この事態を予想して、すでに二か月以上も前に、五十万トンから三十万トン級のタンカーや大型輸送船を二百五十隻以上も総動員して、韓国や台湾、中国、インドネシア、フィリピン、そして遠くアメリカの西海岸まで派遣し、必死に水を「輸入」しようとしてきたのである。しかし、「宇宙船地球号」全体を取り巻く事態は予想以上に悪化しつつあった。

砂漠化した中国大陸

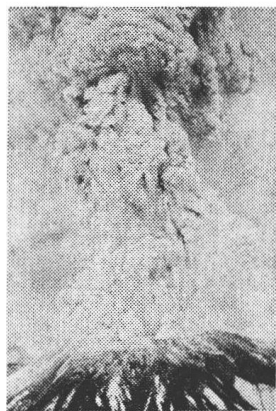
水乞いのための巨大タンカー、共栄丸（五十三万トン）が、最初にたどりついたのは中国であった。ところが、上海、廈門、あもい青島、大連……と、大陸の沿岸都市を軒なみ訪ね歩いてみたが、どうしたわけか、あんなに高く「日中友好」の旗をかかげ、日本からの「遠来の客」を「熱烈歓迎」してくれていた中

文明都市の一人当たりの年間水消費量
(OECD Economic Outlook, 一九八〇年)

シカゴ	290
ニューヨーク	220
パリ	160
ローマ	160
大阪	220
東京	180
2015年の予測	1,130

(単位：トン)

一九八〇年五月十八日に突如大噴火を起こしたアメリカ・ワシントン州のセント・ヘレンズ山。この噴煙も、地球規模の気候異変の引き金のひとつとなったといわれている。



国なのに、このときばかりはピタリと扉を閉ざして、乗組員用の水さえ分けてはくれなかった。

「このままでは航行不能になってしまう！」

はじめのうちは気楽にかまえていた須崎船長も、ようやく事態の容易ならざることに気づき、あわてて船を天津郊外の塘沽港に横づけした。

「入港を拒否する！」、「即刻、退去せよ！」

灰色のフリゲート艦が五隻もまわりを取り巻いて、ラウドスピーカーでしきりに退去を呼びかけてきたが、船長は、あえて聞こえぬふりをして、タンカーを強行接岸させた。へ銃撃されるかも知れない！という不安はあった。しかし、いまはもう、乗組員の叛乱のほうがかわかった。ついきのうも、コップいっぱい飲料水の分配をめぐって、一等航海士と機関士がジャックナイフで渡り合うという惨劇が演じられたばかりである。

接岸と同時に、自動小銃で身を固めた人民軍の兵士が八十人以上もなだれ込んできて、

「船長はどこだ！」

「責任者を逮捕するっ」

アフリカ大陸では、毎年のように大旱魃が繰り返され、子供たちがその最大の犠牲者となっている。(UPIサン)



と叫びながら、どっとブリッジに駆けあがってきた。そして、天津から北京に向かう護送車の窓から外を見たとき、須崎船長の顔はみるみる蒼ざめていった。

へこれはどうしたことだ……まるで『砂漠』ではないか！

あんなにも美しかった緑の沃野が、一面、血を流したような赤土の荒野に変貌していた。ただでさえ暑い大陸の夏である。

雲一片浮かんでいない天空から灼熱の太陽がジリジリと照りつけ、熔鉱炉の中もかくやと思われるくらい大地が過熱していた。そして、いまにも熔けそうなタイヤの下から、燃えきった灰のような赤土の煙が舞いあがり、あたりの光景をますます凄惨なものに変えている。

へあれは？ 白骨の山じゃないか！

死屍るいり……という言葉があるが、まわりの状況はもつともものすごいものであった。折り重なるようにして倒れた人骨の上に、獣の骨みたいなのがのしかかっている。行き倒れた人々を野犬が襲ったのであろうか。しかし、一滴の水もないから、結局、両者とも、砂漠の土として風化しかけていた。そして、護送車が北京の街に近づくにしたがって、人骨の山はますます

中国の『水文地質調査員』の証言（一九八一年七月・上海）

「中国の乾燥・半乾燥地域は、全国土面積の五分の一以上、二百万平方キロにもおよんでいます。そのため、文化大革命の時に、懸命の井戸掘りを行ない、すでに北方の乾燥地帯千二百県の七割にあたる八百五十県で、百八十万本の動力ポンプ井戸が掘られ、そこから汲み出される年間四百億トンの地下水で、一千万ヘクタールの灌漑ができるようになりました。四百億トンという水量は、黄河の年平均流量にも匹敵するものです。しかし、それでも足りず、われわれは毎年、ひどい旱魃に悩まされています」



ます高くなり、かつ幾何級数的にその数を増やしていった。

「もう目撃されてしまいましたからねえ、いまさら隠しだてしようとは思いません。そうなんです……いま、私もは、日本よりもっと激しい大旱魃にみまわれているんです」

北京警察の一室に軟禁された共栄丸の須崎船長の前に、「外交部副書記長」と名乗る男が現われ静かに話しはじめた。

「……こんなふうになるんじゃないかということは、もう十年も前からわかっていたんです。もともと中国の緑は少なく、全国土面積の一二・七％、つまり十八億三千万ムー（一ムーは約六・六七アール）ぐらいしかありませんでした。だから、われわれは人一倍、緑を大事にしなければならなかった。それなのに、『近代化』の名のもとにどんどん樹木が切り倒され、高速道路がつくられ、自動車が入導され、コンクリートのビルが建てられ続けました。しかも、人民公社同士のノルマ争いが引き金となって、焼畑農業がさかに行われるようになり、森林の伐採や破壊がものすごい勢いで進出し、はっと気がついたときには、中国全土が赤・黒・白の三色で塗りつぶされたような状態になっていたんです。赤は赤土、黒は焼け跡、白は灰の色です。緑なんて、どこを見まわしても見あたらずなくなってしまった。それでも、『近代化』が達成されたとはしゃいでいたうちはよかったのですが、何しろ、草も木も根こそぎやっちゃったため、今度は、雨季になって雨がどっと降ってきて、それを貯めておく器がないわけです。その結果、どんどん雨が降り、ただでさえ地肌がむきだしになっている大地をかきむしり、洗い流し、雑草を育てる地力までも黄河や長江（揚子江）に捨て去ってしまいました……それが、ごらんになったような大旱魃をまねき寄せたわけです。だってそうでしょ